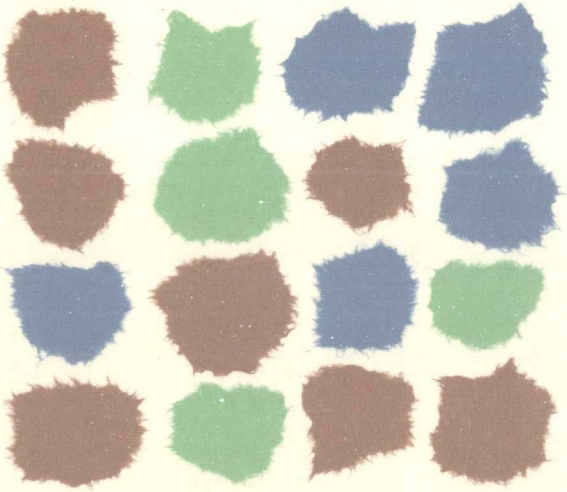
花洛小景

松田道雄の本

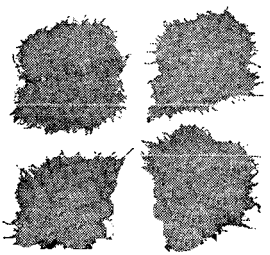


14

筑摩書房

花洛小景

松田道雄の本



筑摩書房

松田道雄の本　第14巻　　第16回配本（全16巻）

1981年2月20日　初版第1刷発行

著　者　松　田　道　雄

発行者　布川角左衛門

〒101-91　東京都千代田区神田小川町2—8

発行所　株式会社　筑摩書房

TEL.（03）291-7651（営業部）

TEL.（03）294-6711（編集部）

振替東京6-4123

装幀　栃折久美子　　明和印刷・和田製本

©M. MATSUDA 1981

0395—74114—4604

目次

I　洛中洛外

洛中洛外
校長さんの死（5）　ホルモン美人と実力美人（7）　春寒うして罪あり（9）　全学連――若さのエネルギー（11）　辻寛治先生教室葬（14）　運転者と行先（16）　サービスはオマケでない（18）　暗殺（20）　総選挙三題（22）　勉強会館（24）　保母さんのこと（26）　おませ（29）　タクシーのスト（31）　再びタクシーのストについて（33）

堀川線のあと（35）　小児マヒの生ワクチン（37）　生ワクチン終了（39）　失われた「ポスト」（41）　ぜんそくシーズン（44）　クリスマス病（46）　柵とニヒル（48）
四条大橋（50）　川と魚（52）　地蔵盆と近代派（54）
危篤状態（56）　デラックス幼稚園（58）　おおぜいのマリヤ様（61）　平井先生と注射（63）　三角ベース（65）
超スピード運転（67）　壬生狂言（69）　御霊さんのお祭り（71）　祇園祭り（73）　海浜学舎（76）　おばあさんやーい（78）　幼年ジプシー（80）　山うるわしく水きよく（82）　花の都の名に負いて（85）　人間喪失の医学（87）　しのぶにあまる代々のあと（89）　宵山（92）
モニター三年（94）　京都の本屋さん（96）　儀式と宴会（99）　過去の呪縛（101）　伝統をまもれ（103）　塾居の弁（106）　保育園と給食（108）　暴力とは何か（110）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

もうかる組織・もうからぬ組織（113）　国防ということ（115）　医者の立場・患者の立場（118）　明治のお稚児さん（120）　指話通訳（123）　ボクシングと学問（125）
病院と面会（127）　心臓移植（130）　世代の断絶（132）
大学紛争管見（135）　内申についての思い出（137）　散歩の時間（139）　夏休み・子ども・母親（142）　チェコの市民（144）　うごく重障児（147）　開校百年（149）　支配のことば・抵抗のことば（151）　付和随行者の弁（154）
無党派の弁（156）　貧乏と貧乏の感じ（159）　私の散歩（161）　霊柩車に乗せられた話（163）　人間ヘドロ（166）
二条のお城（168）　市電はのこしてほしい（171）　一文菓子屋（173）　もう一度市電について（176）　クーラーを買うのはむずかしい（178）　中京の生物学（181）　小学校のクラス会（183）　メンコあそび（185）　老後と老

衰（188）　老核家族（191）

II　花洛小景

花洛小景
子供るす（197）　祭りと私（200）　ネルのエプロン（202）
地蔵盆（205）　中京の町（208）　加茂川（211）　春景色（214）
冬景色（216）　京都人気質（219）　「花洛」と私（221）

『花洛小景』によせて　225

松田道雄年譜　231

編集　藤好美知

花洛小景

I

洛中洛外

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

洛中洛外

校長さんの死

京都のある中学の校長さんが自殺した。その学校で道徳教育が率先しておこなわれていただけに、大きな反響をよんでいる。私はその校長さんを知らない。たまたま、私の子どもの一人が、その先生の授業をうけたことがあって、その人の一端にふれることができた。何でも、ほかの先生が休んだので補講をやりに来て『路傍の石』を読んでくれたということだった。そのとき先生は目に涙をうかべて読んでいたそうだ。

その話をきいてから、私は、その校長さんに大きい同情をよせるようになった。

きっと、まじめな人にちがいない。文部省のやろうとしている道徳教育を先ばしりしてやって点数をあげようというようなことで、道徳教育をやったのではないだろう。子どもがわるくなるのは環境のせいだから、環境をあらためないで、修身をおしえたところで、子どもはよくならないだろうということは一般的にいって正しい。だが現在の環境をにわかにあらためられない場合にどうすればいい

かという問題は、たえず出されている。それにたいして何もしないで、無策の策とでもいうような立場でとおすことも、もちろん一つの実践の方法であろう。

けれども、そういう態度を、いろいろと考えたうえでとっている人も、はじめから怠けもので無為の人と自分を区別するために苦しまねばならぬ。この苦しみにたえない種類の人間がいる。悪が目のまえにあるとき無為ではすごせない種類の人間である。子どもが非行をするのにたいして、環境をかえることができないなら、せめて、りっぱな文学作品（『路傍の石』がその手本だとは思わないが）でもあたえて、それによって、すこしでも非行をくいとめたいと思って、はじめて教えるクラスで作品を読んでやり、自分も感動して涙をながすというのは、そういう実践型の人間である。

だが、今の社会では、すべての実践にたいして政治的な評価があたえられすぎる。校長としての教師が生徒に文学作品をあたえれば、それは文部省のほうから「道徳教育」として取り上げられ、道徳教育の見本にされてしまうのである。

そういう政治的な評価が、実践的な人間を、本人の予期しない舞台に立たせてしまうということがある。

自殺した校長さんの場合でも、そういう取りまき連のおせっかいが、校長さんを困難な立場においこんだのではないだろうか。

私は道徳教育がわるいとは思わない。次の世代に、私たちが今日もっている道徳がどんなものであるかを、身をもっておしえる以外に、次の世代に道徳をつたえる方法はないと信じる。だが、それは学校においては、どこまでも教師の身をもってする自発的な行為としてはじめて効果がある。

はじめていったクラスで涙をうかべながら『路傍の石』を読むということは、教師として自発的にする行為である。

それは、何人かの子どもに深い印象をあたえた。『路傍の石』が道徳であるからではない。教師が道徳的であったからだ。

教師の自発的な行為を役所の命令とし、その役所が上の方で政党とつながり、政党の政策の一つとしての「道徳教育」にしてしまうことが、道徳と道徳をおこなう人をころしてしまうのである。

（35・2・9）

ホルモン美人と実力美人

映画をみにいって時どき経験することだが、むかしよくみた女優が別人かと思うほど変わって出て来ることがある。それと逆に、あの女優は以前とほとんど変わっていないなと感じることもある。年齢によって全く変わってしまうというのは、以前の美しさがホルモンによって支えられていたのだろうから、これをホルモン美人といっていいだろう。

年齢によってあまり左右されないというのは、その人の美しさはホルモンにたよっているのではないという意味で実力美人といっていいだろう。

どちらがいいかということは問題だが、女優というものは、映画や芝居をはんなりさせるのが役目だということにしてしまえば、ピークにおいてはホルモン美人のほうが、高いだろう。しかし、俳優

という職業を演技の芸術家であるとすると、長期にわたってヒロインをつとめることのできる実力美人のほうが、高いところに到達できるだろう。

女優ばかりではない。学者にもホルモン学者と実力学者というのがあるように思う。

若いとき、ガンバリをきかせて、何か人を驚かすような仕事をしたが、その後は、その高名によって得た地位に安住して、かくべつ他の学者とかわったようなことをしないというのはホルモン学者である。

わかい時に、新聞に写真がのるような新発見はしなかったが、わかい時のペースを後年までみださないで研究をつづけ、その人の研究が終わったときにふりかえってみると、全体が巨大な仕事になっているというのは、実力学者である。

これも、どちらがいいかということは、むずかしい問題だ。一人の人間が学者として一定の地位を得ると、もうそこで何もしないでも一生をおわることができるという現在の研究の制度がつづくものとすると、ホルモン学者よりも実力学者が研究の座にいてくれたほうがいい。

だが学問の世界というものが、だんだんきびしくなって、ある一定の期間内に最大のエネルギーを集中しないと有効なピークに達しないということになると問題はちがってくる。

ちょうどスポーツの選手とおなじで、オリンピックに出場できる年齢というと、どの種目でもだいたいきまってくるように、きびしさの要求される学問では、二十五歳から三十歳までが、学者の適齢期であるようだ。

ホルモン学者を輩出させて、そのエネルギーを結集するというのが、一国の文運を隆盛ならしめる

ゆえんであると思う。

学者の優遇ということは、学問をさかんにするためにはぜひ必要なことだが、ホルモンのなくなったホルモン学者の養老施設に投資するよりは、二十五歳から三十歳までの学者を優遇することのほうが大事だろう。

研究をしている若い学者が、研究と無関係なアルバイトのためにエネルギーを浪費しているというようなことは、国のためには大損害である。

若い学者の優待とならんで、研究施設を養老院ととりちがえているホルモンなきホルモン学者を淘汰して、実力学者にみっちり勉強させるようにすることが、ほんとの学者の優遇ということであろう。

（35・3・15）

春寒うして罪あり

小児科の医者の診察室というものは一種のバロメーターのようなものだ。気象に異変があるたび、やってくる顔ぶれがかわる。

サクラが咲いているのに、まだストーブをたかねばならぬような日がつづくと診察室には夜間にしくじる幼児が多くなる。気温がさがると貯水室の壁がちぢんであふれてしまうのもあるだろうし、体温をたかめるために心臓ポンプがよく動いて血のめぐりをよくするので、製造能力の高まるのもあるだろう。

いずれにしろ今までしくじらなかった幼児が赤ちゃんに逆もどりすると、お母さんたちは洗濯で労働強化になる。何とかして、しくじらさぬようにしようというので、いろいろの努力がはらわれる。どこでもやるのは夕食の水分のパーセントをさげることである。熟睡型でないお母さんは、夜中に二度も三度もおきて子どもをゆりおこす。

当面の補強工作としては、一度しまいこんだ防水用具をとりだしてきて、ねるまえに装着する。

ところがお母さんがいくら努力しても、さむい夜がつづくかぎりはんらんはやまない。診察室でお母さんたちの話をきいていると、この就寝前の装着にたいして二つの型の反応があることがわかる。

一つは装着にたいして平気な型である。お母さんが、子どもに防水用具の装着を多少とも恥ずべき現象であることを意識させ、自戒自粛させようと思って、

「お向かいの真ちゃんもお隣の良子さんももうこんなものしてないわ」

というと

「かわいそうやねえ」

とお母さんに同意を求める。

もう一つの型は防水用具の装着をひどく恥ずかしがる。ねる前、装着をめぐって一悶着する。結局は強制執行されて泣き泣きねむる。翌朝またしくじりが判明したとき、お母さんが、

「これ誰がやったの」

とたずねると

「ペコちゃん」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo